

世代間コミュニケーションと歴史教育 ——歴史物語『梅松論』の継承と変容——

福田景道*

Akimichi FUKUDA*

Education of History and Intergenerational Communications :
Succession and Transfiguration of "Bai-shou-ron" (梅松論) as a history

1 歴史物語の特質と世代間コミュニケーション

本稿でいう「歴史物語」とは、文芸的な歴史叙述、歴史を題材とする物語体の文学作品を意味し、長期間の歴史事象を対象とし、「通史」を形成することを基本とする。該当する作品は、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『秋津島物語』『六代勝事記』『五代帝王物語』『唐鏡』『梅松論』『保暦間記』『増鏡』『神明鏡』などである⁽¹⁾。

いずれの作品も、時代の変動や社会の変化に密接に関連する。歴史文学の一種であるが、史書と見なすこともできる。社会史・政治史・文化史の史料の役割も果たしてきた。

歴史物語を「世代間コミュニケーション」との関係から把握する場合、すべてが通史性を共有する点がまず注目される。通史性をもつことは、一人の個人の人生を超えた複数世代を包含することに直結し、必然的に世代間の差異が表出される場合が多いと考えられるからである。

また、歴史物語には、漢文体によるのが通例だった歴史的・通史的知識を仮名を主体とする文章によって平易に伝達できるという特性がある。特に中世以降の歴史物語は、初学者や幼童や非貴族を対象とする歴史教育の教材としての教導的機能も保有する。この点については、別に論じているので⁽²⁾、以下にその大要を世代間教育と関係付けて示しておく。

中世にあっては、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』などの既存の歴史物語が教訓・貴族的教養などの修得に資するようになったと推察される。鎌倉新時代の新世代が前代の歴史事実を知る最も簡便な方法は王朝歴史物語を読む行為であったに違いない。また、『秋津島物語』『六代勝事記』『唐鏡』などが同じく啓蒙書・教育書の役割をもって新たに著作されたと考えられる。

『六代勝事記』には「後生の官学をすゝめむ事」⁽³⁾と次の世代への勧学ということが目的の一つとして表明されている。『五代帝王物語』は「心得安からむがためなり」⁽⁴⁾と理解しやすいように配慮したとを宣して擱筆している。『秋津島物語』の序文には「すべらぎのかしこき御よには、いにしへにしたがへかながへてよろづのまつり

ごとをおさめ給ふにぞありける。(中略)これすなはちふるきをたづねてあたらしきをしるいはれなり。』⁽⁵⁾(一丁オ)と、温故知新の教示が意図されていると思われる⁽⁶⁾。さらに「時々神たちの大学のつかさにつどひて、先聖先師にものなどひ申給へる御ともに侍るおりのあるべし」(三丁ウ)と、語り手と学問の場とのかかわりまでもが明記され、螢雪の功などの故事の列挙によって勉学への志向が示されるなど、教育的行為への関心の高さが随所にうかがえる。『秋津島物語』の平易さから見ると、初学者・若年層を讀者に想定していると想定できよう。これらの鎌倉時代成立の歴史物語には、老人が若い世代に歴史知識を伝達する世代間教育を意図するという共通性が認められるのである。南北朝・室町時代に至っても、京大本『梅松論』に「若人ナドハヨモシラジ。ヨシ、イカヤウニモアソバセ。(中略)尼ガ孫彦数モヲ、シ。是等ハ皆家々サルベキ人々ノ御子孫ナレバ、見セテ心ヲツクルベシ」⁽⁷⁾(46頁)と若年者の教育に役立てたいという筆者の意図が明確に示されている⁽⁸⁾。したがって、上の共通性は、鎌倉時代だけのものではなく、中世全体に通有されると予想される。

歴史物語(「世継」)が『愚管抄』に「タヽヨキ事ヲノミシルサン」⁽⁹⁾とするものと断じられ、『五代帝王物語』に「代々の君の目出き御事ども」⁽¹⁰⁾を記す書物に数えられるのも、初期教育書性格に關与するのかもしれない。あくまでも初学者のための入門書として凶事より吉事が優先されたと思われるのである。

このように、中世期には、歴史物語諸作品が世代間歴史教育の教材的な役割を果たしていたと推量できる。

また、仮名文体による通史的歴史叙述には「枠物語(Rahmenerzählung)」形式を採用するものが多い⁽¹¹⁾。枠物語とは、物語の登場人物が作中で別の物語を語る形式の物語で、「問答物語」⁽¹²⁾・「おとぎの形式の文学」⁽¹³⁾・「談論文芸」⁽¹⁴⁾・「場の物語」⁽¹⁵⁾・「対話様式作品」⁽¹⁶⁾などとも呼ばれる作品群であるが、該当作品に歴史物語が最も多く、歴史物語の性格と枠物語とは無縁とは考えられない⁽¹⁷⁾。枠物語は、読みやすさ、親しみやすさを促進する形式でもある。これによって初心者が抵抗なく歴史知識を修得できたのではないかと思われる。年少者への教育目的を明言する作品も多い。中世において問答体の歴史

* 高根大学教育学部言語文化教育講座

叙述が数多く著作されるのも、教育的意図と切り離しては理解できない。これらの歴史物語を教材として、年長者が年少者に歴史を講述する世代間教育、世代間交流の場が成立していたことも少なくなかったであろう⁽¹⁸⁾。

以下に、歴史物語の歴史叙述の外枠に顕在化する世代間コミュニケーションとその中で成り立つ世代間歴史教育の実相について眺望し、私見を述べる。

2 歴史語りの場における世代間教育

『六代勝事記』と『五代帝王物語』は枠物語形式に依らない歴史物語であるが、「筆者」が自らの経歴を告知した上で、体験に基づく歴史叙述を展開している。この「筆者」の意図に注目する。

前述のように『六代勝事記』には次世代への学問奨励の意図が表明されているが、それを勧める「筆者」は二条帝の治世（1161～1163年）に生まれ、高倉帝時代（1168～1180年）に仕官し、「貞元の今」に「六十余」歳である人物に設定される⁽¹⁹⁾。作品内に示される執筆時点である「今」は、編年的構成の最終年時が貞応2年（1223）

5月の出来事であることから⁽²⁰⁾、貞応2年5月から翌3年11月までの1年半と考えられ、「筆者」の年齢は、61～64歳になる⁽²¹⁾。この人物が官途を目指す若者に自身が見聞した六代の歴史事実を教授するのが『六代勝事記』なのである。

『五代帝王物語』の「筆者」は、後堀河院の治世は「未だ生れぬ世」と記されるので、次の四条帝時代（1232～1242年）の出生と想像される。最新の記事が1272年5月であるので、40歳以上の執筆であることは疑えない。この作品の成立時期が登場人物の官職名から1302年以降と想定されているので⁽²²⁾、それに従えば、70歳以上の人物と見なされていたことになる。この高齢者が後進のために歴史を記し伝えているというのが『五代帝王物語』の趣向であると思われる

る。

以上のように、『六代勝事記』と『五代帝王物語』は枠物語形式ではないが、外枠に「筆者」が設定されて、その「筆者」による世代間歴史教育が遂行されていると認められる。作品の著作意図や読者の享受の実際がそれに連動していないはずはない。

なお、彼らは「筆者」であって「作者」ではない。「筆者」は作品内の存在であって、物語の「語り手」に相当する。仮想的枠物語の外枠を構成していると言える。「作者」はさらにその外側にいる作品外の存在である。これらの事実物語作品の作者が探究される際に、この「筆者」の表明する履歴を根拠にそれに該当する作者像が想定されている場合が多い。たしかに、「作者」と「筆者」とは無関係ではないが、同一人物でもない。「作者」と「筆者」は一度切り離されるべきであろう⁽²³⁾。本稿でいうところの「筆者」は作品世界を創造する絶対者ではなく、作品世界内に仮構された登場人物の一人である。この意味で、枠物語の外枠で活動する「語り手」と同様に把握できるのである。

さて、純正枠物語系の歴史物語でも、世代間コミュニケーションの様相が描き出されている。中でも、『大鏡』は外枠相当部分が最も詳細で具体的な作品で、世代を異にする人物間の対話場面が数多く描き出されている。『大鏡』は、次のように起筆される。

先つ頃、雲林院の菩提講に詣でてはべりしかば、例人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嬬といきあひて、同じ所に居ぬめり。「あはれに、同じやうなるものさまかな」と見はべりしに、これらうち笑ひ、見かはして言ふやう、
(世次)「年頃、昔の人に対面して、いかで世の中の見聞くことをも聞こえあはせむ、このただ今の入道殿下(道長)の御有様をも申しあはせばやと思ふに、あはれにうれしくも会ひまうしたるかな。今ぞ心やすく黄泉路もまかるべき。(下略)⁽²⁴⁾ (13頁)

通常の老人よりも格段に年老い、異様な相貌の3人の男女が目撃されるのが『大鏡』世界開闢の瞬間である。そのうちの一人が、「昔の人」すなわち昔に親しかった人に再会して、これまでの見聞と藤原道長の有様を語り合うことが、今生の望みであることを宣揚する。それに続く対話の中で、老人の一人「大宅世継」が150歳または190歳、もう一人の「夏山繁樹」が140または180歳であることが明らかになる⁽²⁵⁾。この超老人の「昔物語」が望みどおりに開始されるのであるが、それに際して、

いで、さうざうしきに、いざたまへ。昔物語して、このおはさふ人々に、「さは、いにしへは、世はかくこそはべりけれ」と、聞かせたてまつらむ (19・20頁)

と言って、たまたま同じ場所に居合わせた人々（「このおはさふ人々」）に昔の世の中の出来事を語り伝えようとする。百歳を遥かに超える希有な老人に比べると、その場に居合わせた聴衆は遥かに若年であったに違いない。聴衆の代表者の役割を担う「年三十ばかりなる侍めきた

西暦	作品名
1000	栄花物語正編
1100	栄花物語続編群 大鏡 (大鏡後日物語)
1200	今鏡 水鏡 (宝物集) (無名草子) 秋津島物語 (愚管抄) 六代勝事記
1300	唐鏡 五代帝王物語
1400	(神皇正統記) 保暦間記 増鏡 梅松論 源威集 神明鏡

(注) 成立年時はすべて推定。

太字は枠物語。

() 内は関連作品

表1 歴史物語系作品成立年表

る者」(15頁)は百歳以上年少である。語り手と聞き手の間に大きな世代差が生まれている。

夏山繁樹は、自らを「故太政のおとど貞信公、蔵人の少将と申し折の小舎人童、大犬丸ぞかし」(14頁)と自己紹介する。貞信公藤原忠平と人生を共にしたという自覚が繰り返し語られる。繁樹は忠平時代の人物と見なせる⁽²⁶⁾。世継翁も同時代の人物である。聴衆たちは「ただ今の入道殿下(道長)」という言い方から明白なように、道長時代の人々である。忠平は道長の曾祖父なので、語り手と聞き手の間の世代差はおよそ3世代ということになる。冒頭に、「例人よりはこよなう年老い、うたてげなる」(13頁)と形容された理由がここで明らかになる。通常の老人よりも百歳以上年老い、11世紀初頭にあつて10世紀半ば頃の風体でいることが「うたて」(異様)なのであろう。

同様の世代間格差意識は、他の箇所にも現れる。

世間の摂政・関白と申し、大臣・公卿と聞ゆる、古今の、皆、この入道殿(道長)の御有様のやうにこそはおはしますらめとぞ、今様の児どもは思ふらむかし。されども、それさもあらぬことなり。言ひもていけば、同じ種一筋にぞおはしあれど、門別れぬれば、人々の御心用も、また、それにしたがひてことごとになりぬ。(22頁)

これも大宅世継の揚言である。150歳(190歳とも)の彼にとっては、百歳に遠く及ばないであろう聴衆は、正しく稚児(「児」)にはかならない。「一筋」(一つの血筋)が時間の経過に従って複数の「門」(家系)に分派するという言い方も、世代交代が一家門を異質な多数の家族分立をもたらすという摂理を説くものと考えられ、世代間の問題と無関係ではない。

世継翁は、また、自らの歴史語りへの「あきらけき鏡」という賛辞を承けて、「今様の葵八花がたの鏡」が輝きはすばらしいが曇りやすいのに対して、「いにしへの古体の鏡」は特に手をかけなくても明るさを永続させる長所をもつことを強調する(57頁)。古鏡の不朽性が長命の世継に重ね合わされているのであろうが、今様の鏡と古体の鏡の隔絶が認識されていることも否定できない。ここにも世代差が投影していると言ひ得る。

若い世代の代表者とも言える「年三十ばかりなる侍めきたる者」と語り手との年齢差、世代差も強く認識されている。世継翁が若い侍(「殿」)が巧みに相槌を打ち、歴史語りを円滑に進行させたことに感謝する場面がある。

御宿にまゐりて、殿の御才学のほどもうけたまはらまほしう思ひたまふるやうは、いまだ年頃、かばかりもさし(い)らへしたまふ人に対面たまはらぬに、時々加へさせたまふ御言葉の、見たてまつるは、翁らが玄孫のほどにこそはとおぼえさせたまふに、この知ろしめしげなることども、思ふに、古き御日記などを御覧するならむかしと心にくく。下藁はさばかりの才はいかでかはべらむ。ただ見聞きたまへしことを心に思ひおきて、かくさかしがり申すにこそ

あれ。まこと人にあひたてまつりては、思し答めたまふこともはべらむと、恥づかしうおはしませば、老の学問にもうけたまはり明かさまほしうこそ侍れ(407・408頁)

若侍(「殿」)の学識を賞賛し、「かばかりもさし(い)らへしたまふ人(これほどまでに返答してくださる人)」には会ったことがないとまで言う。ここには体験によって歴史知識を身に付けた世継と「古き御日記」を読みこなして学問(「才」)として歴史を修得した若侍とが鮮やかに対照されている。この場合、新・旧の世代が相互に教え合う関係が成り立っているとも言える。しかし、世継は「下藁」であるゆえに十分な教育機会が得られなかったと明言する。若侍にあつて世継にない学識は、身分差によるもので、世代差とは無関係である。やはり、忠平時代を生きた世継翁世代が、道長時代しか知らない若侍に歴史知識を伝達する構図は動かないと思われる⁽²⁷⁾。

注目すべきは、世継翁が、この侍を「玄孫」の年齢と見る点である。道長は忠平の曾孫であるので、1世代分齟齬することになる。ただし、この作品において、道長とその子息たちの質的な相違は認められないので、道長とその後継者の世代を道長世代と一括しても支障はないと思われる。むしろ忠平と道長の間に2世代が挟まれている点に意味がある。

以上のように、粹物語としての『大鏡』の外粹部には、「忠平世代」の語り手と「道長世代」の聴衆が対比的に描出されていると言って大過ない。

その『大鏡』には、老人の政治的有用性も説かれる。これも世継翁の言である。

世はいかに興あるものぞや。さりとも、翁こそ、少々おきなのことは覚えはべらめ。昔さかしき帝の御政の折は、「国のうちに年老いたる翁・姫やある」と召し尋ねて、いにしへの掟の有様を問はせたまひてこそ、奏することを聞こし召しあはせて、世の政は行はせたまひけれ。されば、老いたるは、いとかしこきものにはべり。若き人たち、なあなづりそ(20・21頁)とあり、執政のために「いにしへの掟」の活用が重要視され、その情報提供者として老人が尊重されている。後に『大鏡』が中世の歴史物語と同様に歴史教育の教材として享受されるようになる遠因がここに看取される。

3 粹物語式歴史物語と世代意識

古代の歴史物語の様式を堅守する中世の粹物語式歴史物語『増鏡』にも、『大鏡』と同様に、語り手と聞き手の世代差が顕示される。

『増鏡』の語り手は、「八十にもや余りぬらんと見ゆるあま尼」で、自身が「百とせにもこよなく余り侍ぬらんと告白し、「古代にみやびか」と形容される⁽²⁸⁾(247・248頁)。外見は80歳過ぎだが、実際には100歳を優に超えている、歴史物語の語り手に相応しい老女である。一方、聞き手は、嵯峨の清涼寺に参詣して偶然この老女に遭遇した人物であるが、出自・経歴・年齢は明かされない⁽²⁹⁾。ただ

代	天皇	歴史叙述の対象領域	
1	神武 … …	水鏡	(秋津島物語)
54 55	仁明 文徳 …		大鏡
59 60	宇多 醍醐 …	栄花物語	
68	後一条 …		今鏡
73	堀河 …	弥世継	
77	後白河 …		六代勝事記
80 81 82	高倉 安徳 後鳥羽 …	増鏡	
86	後堀河 …		増鏡
90	龜山 …	増鏡	
96	後醍醐		増鏡

図1 歴史物語対象年代図

し、歴史物語の読書経験は詳細に語る。

いさ。たゞおろく見及びし物どもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代より、いとあらゝかにしるせり。かの次には、大鏡、文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍りにや。又世継とか、四十帖の草子にて、延喜より堀川の先帝まではすこし細やかなめる。又なにかの大臣の書き給へると聞き侍し今鏡に、後一条より高倉の院までありしなめり。まことや、いや世継は、隆信の朝臣の、後鳥羽院の位の御ほどまでをしるしたるとぞ見え侍りし。その後の事なん、いとおぼつかなくなりけり。(249頁)

過去に『水鏡』『大鏡』『栄花物語(世継)』『今鏡』『弥世継』を読んだ経験を語り、『水鏡』→『大鏡』→『今鏡』→『弥世継』と連続させると神武天皇から後鳥羽院までの仮名による日本通史が完成することを強調する。この連続性は、当時の歴史物語的作品群の実状を正確に伝えるものではなく、『増鏡』の主題と構想に基づいて仮構されたものと考えられる⁽³⁰⁾。しかし、実状であるか否かに関係なく、歴史物語を通史として享受した人物としてこの聞き手は設定されているのである。歴史物語の優秀な読者であるだけでなく、歴史物語による歴史の学習者なのである。

この聞き手は、一方で、語り手の老尼に対しては、かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ、仮名の日本紀にはすなれ。又かの世継が孫とか

いひし、つくも髪^{かみ}の物語も、人のもてあつかひ草になれるは、御有様のやうなる人にこそありけめ。猶の給へ。(248頁)

と、『大鏡』や『今鏡』の作品内に書かれている内容を現実の出来事であるかのように扱い、眼前の老尼に同じ役割を期待する⁽³¹⁾。世継翁が『大鏡』を語り、つくも髪の老女が『今鏡』を語ったように、新しい鏡物の語りを懇請しているのである。聞き手が作品世界の外枠にいて歴史の現場に参入していないのに対して、老尼は語り手になると作品世界内の登場人物と同質の存在に転じるのである。ここに現出する、歴史の体験者である語り手と歴史書の読者である聞き手の関係は、『大鏡』の語り手世継翁と聞き手若侍の関係に近似するのではないであろうか。歴史を実見してきた世代と書物でしか歴史を知り得ない世代との対照性が見いだせる。

このような歴史語りの外枠部分における世代意識は、『今鏡』に最も顕著に表現されていると思われる。

『今鏡』の語り手は、嘉応2年(1170)に、『大鏡』の最終年万寿2年(1025)年以降の146年間⁽³²⁾の歴史を大宅世継の孫女が物語る設定の作品である。この語り手は、かつて紫式部に「あやめ」という名で仕えていたところ、式部に「今鏡」「小鏡」という呼称を与えられたという逸話の持ち主である。これによると、紫式部より若く万寿2年には、十代または二十代であったのではないかと思われる。この場合、祖父である世継翁との年齢差が百歳をはるかに超えることになり、不自然である。しかし、別に、

もとは都に百年あまり侍りて、その後、山城の^{のち やましろ こま}のわたり、五十年ばかり侍りき。さて後、思ひかけぬ草のゆかりに、春日野^{かすがの}わたりに住み侍るなり。⁽³³⁾

巻名	内容(天皇名)	時代
1 すべらぎの上	後一条院 後朱雀院 後冷泉院 後三条院	中頃 (昔)
2 すべらぎの中	後三条院 白河院 堀河院 鳥羽院 崇徳院	近き世
3 すべらぎの下	崇徳院 近衛院 後白河院 二条院 六条院 高倉院	この世 今の世

表2 『今鏡』天皇紀(巻第1~3)構成表

(27・28頁)

と語られており、この時点で150歳をかなり超え、万寿2年時点で青年期前後であったと見なすほかない。

このように語り手を捉えると、『今鏡』の歴史語りを遂行するにはやや不適切な面が指摘できる。都や宮廷周辺世界に叙述の対象を限定する傾向の顕著なこの作品の語り手は都在住者が相応しいに違いないのに、彼女は百年しか都に居住していない。万寿2年に20歳だったとすると、146年中66年間は都の外から都内の出来事を見ていたことになる。ここに誤写・誤記・誤読はあり得ない。語り手が都を離れてからの情報源が周到に用意されていると思われるからである。

近き世の事も、おのづから伝へ聞き侍れば、おろおろ年の積りに申し侍らむ。若く侍りし昔は、しかるべき人の子など三四人生みて侍りしかど、この身のあやしさにや、みな法師になしつつ、あるは山踏みし歩きて、あともとどめ侍らざりき。あるは山籠りにて、おほかた見る世も侍らず。

ただ養ひて侍る五節命婦とて侍りし、内わたりの事も語り、世の事もくからず申して、琴のつまならしなどして聞かせ侍るも、齢のぶる心地し侍りし、はやくかくれ侍りて。また殿守のみやつこなる男の侍るも、初冠せさせ侍りしまで養ひ立てて、この春日の里に忘れずまうで来るが、朝浄め御垣のうちにつかうまつるにつけて、この世の事も聞き侍る。源を知りぬれば、末の流れ聞くに、心汲まれ侍り。(33頁)

「近き世」の出来事は宮仕えをしていたらしい養女から伝え聞いているので語ることができるというのである。養女の没後の「この世」の諸事は、「殿守のみやつこなる男」（主殿寮に下級官僚として勤務する息子）から聞き知っていると言っている。一応は、146年間すべての語り手となる資格をもつと言ってよい。しかし、直接の見聞だけでなく、子息たちを介して間接的に入手した知識が用いられるのは不自然である。なぜ、146年間全部を語り手の都在住期間とししないで、本人・養女・実子に情報源を分けたのであろうか。

これは『今鏡』の時代区分意識に基づくと思われる。語り手が直接的な見聞を語る「昔」「中頃」、養女の五節命婦が詳細な史実を伝えた「近き世」、殿守を勤める男子が伝える「この世・今の世」に『今鏡』の対象年代が3分割でき、これが上の情報源の差異に一致するからである。「近き世」の起点は、天皇の歴代では後三条院であり、撰関家は師実、閑院流は公実、村上源氏は俊房・顕房兄弟が該当する。このような時代区分法の実態については、別稿⁽³⁴⁾で論じたので、ここでは詳論しない。

さて、天皇中心の編年史を形成する、『今鏡』の最初の3巻「すべらぎ」上・中・下においては各巻が3時期区分にほぼ対応している（表2参照）。世代に対応した区分法と言え。一方、列伝部5巻（「藤波」上・中・下、「村上源氏」、「御子たち」）は系図・系譜を構成の骨子とするので、3時期が混在せざるを得ず、時期区分を読み

取ることは難しい。

しかし、時期や時間ではなく、「世代」に注目して、列伝部を見ると、藤原撰関家、藤原氏閑院流、村上源氏の3家系について、共通して「近き世」の開始が系譜上の分岐点となっていることが確認できる。後三条院・白河院時代に属し、近き世の起点となる師実・公実・俊房・顕房の部分から記述が画然と詳しくなり、特別な扱いがなされていると推定できるからである⁽³⁵⁾。

以上のように、『今鏡』では、語り手の情報源の区分が、歴史叙述の時代区分に合致していると推断できる。内側の世代意識に即応して外枠の世代が明確に設定されているとも言える⁽³⁶⁾。

『大鏡』『今鏡』『増鏡』などの鏡物系列の歴史物語では、歴史叙述上の主題・構想とその外周を覆うように設定されている語り手と聞き手の世代間対話とが連動していることが確認できる。枠物語の外枠が十全に機能しているとも言える。同様に外枠が顕著に作品世界と関わるのが『梅松論』である。以下に、『梅松論』の歴史語りの場面設定に注目して、読者の世代交代が枠物語の性格を規定する例を示す。

4 『梅松論』の歴史語りと「世代」

『梅松論』は『大鏡』に次ぐ詳細で具体的な物語場面を外枠としてもつ歴史物語である。また、全歴史物語中、現存諸本間で外枠部分の異同が最も大きい作品でもある。

この異同を重視した場合、古本系統の京都大学蔵本（京大本）、天理図書館蔵本（天理本）の2本⁽³⁷⁾と流布本系統の諸本との間に序文・跋文部分に見られる著しい相違が注目される。

ここで取り上げる3系統の関係については、京大本と天理本とは別系統でともに古態を残し、流布本は京大本にやや近い後出本と見られ、さらに天理本と流布本には一定の方針の増補・改修がそれぞれに指摘されている⁽³⁸⁾。

以下に、3系統の外枠設定を概観しておく。

京大本の冒頭は、歴史語りの時間・場所・天象・登場人物を克明に描出する。視見する老尼の耳目を借りて、①「法印トヲボシキ年鳩杖ニ及ル」、②「卅余ナル僧」、③「廿七八斗ナル僧」、④「見二人（中略）一人ハ廿斗カトミヘテ（中略）一人ハ十五六ト覚ユル」、⑤「七十二及老法師一両輩」、⑥「ヒタキ付ノ跡ミユル遁世者」（8頁）が歴史語りの場を形成する配役として紹介される⁽³⁹⁾。次に「先代様」の語義をめぐって談論が始まると、⑥の遁世者（ア）、②または③の一人かと思われる「侍法師⁽⁴⁰⁾」（イ）、⑤の中と思われる「七十斗見ル法師」＝「覚弁」（ウ）が持論を展開して脚光を浴び、法印によって覚弁が正解と決着される（エ）（8・9頁）。

十代後半から「鳩杖」（80歳程度か⁽⁴¹⁾）までの幅広い年齢層の人物がそれぞれの経歴や学識や立場からの発言をするのであるが、そこに世代差も具現する。15、6歳と20歳程度の「見」二人に代表される若年世代に対して

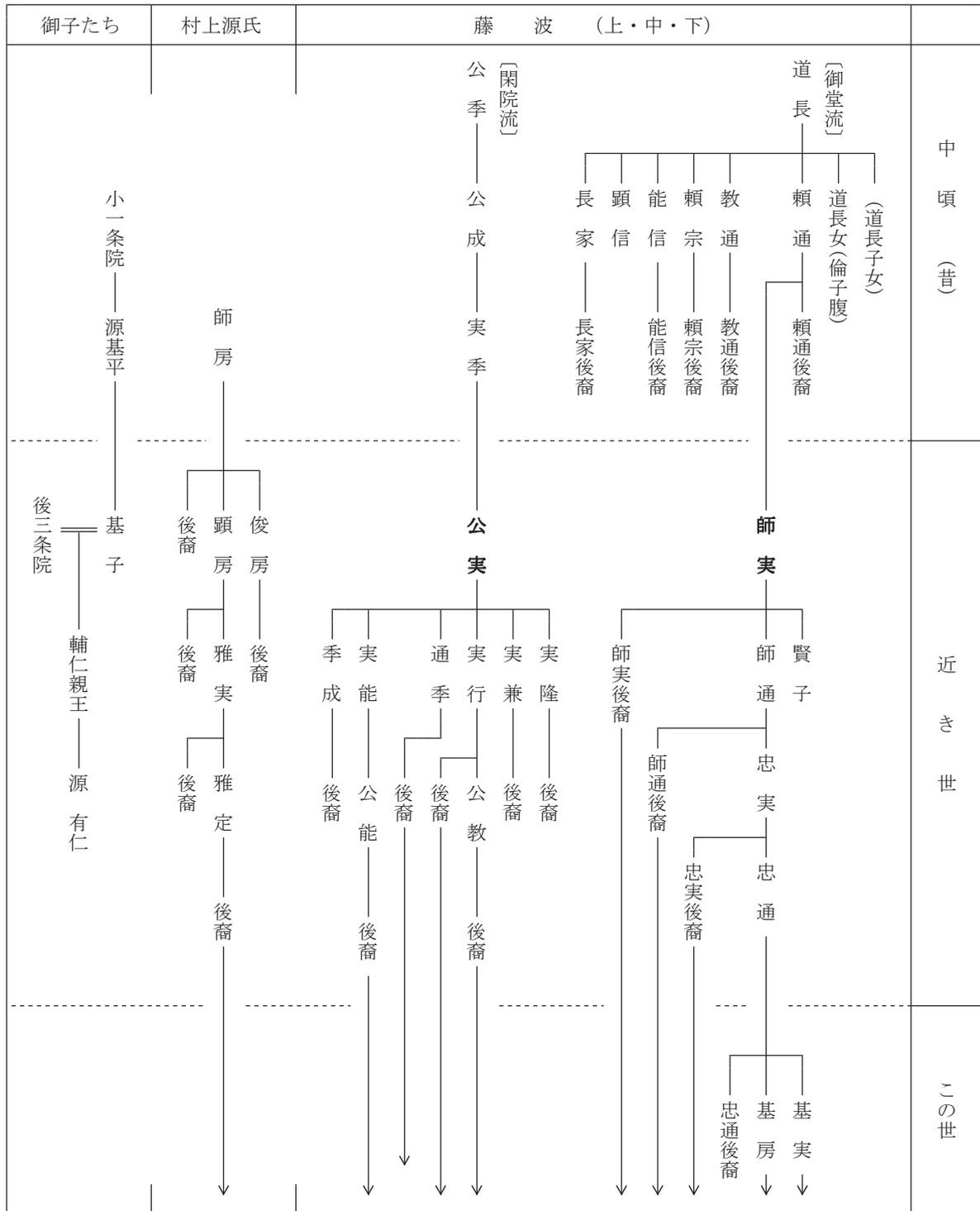


図2 『今鏡』列伝部略系図(巻四〜六「藤波」、巻七「村上源氏」、巻八「御子たち」)

その他の壮年・老年世代が歴史知識や宗教的知識を教授するという構図が明瞭である。実際に歴史語りを担当するのは法印であるので、若年の聞き手との間にはおよそ3世代の差が想定できる⁽⁴²⁾。

また、隣で窺う老尼が筆者として存在する。粹物語の外枠部分に、対話する語り手・聞き手とは別に、筆者を設定するのは、『大鏡』と『梅松論』のみの特性である。この人物は、「我々風情ノ古尼比丘尼一二人相具テ」(8頁)と自ら老境にあることを暗示する。跋文に至ると、「清書シテ八十地ノナグサミニモナシ、又尼ガ孫彦数モヲ、

シ」(46頁)と多くの孫や曾孫をもつ80歳前後であることを告知する。この作品では、最高齢の語り手世代に属すると思われる。下巻のみ残存し、その部分は古本系統に属する古写本に寛正本(彰考館蔵寛正七年奥書本)があるが、跋文の部分は京大本に一致している⁽⁴³⁾。

なお、このように具体的な筆者像が描かれるのは京大本のみである。京大本には、「耳遠ナレバ申ニ及ズ」(12頁)「クモリナキ鏡ニ向フ心地」(45頁)などの『大鏡』を明らかに踏襲する表現があり、鏡式歴史物語の伝統を継受するところにも特色が認められるが⁽⁴⁴⁾、天理本や流布本

系諸本にはこれらの表現は見られない⁽⁴⁵⁾。

次に天理本の外枠設定を取り上げる。京大本と同等に詳細な場面描写がなされ、①「法印ト覚敷テ、齡ヒ鳩杖ニ及ヘル老僧」、②「年ノ程三五、二八ト覚シキ少人二人リ」、③「出世兩人」、④「晩出家ト覚敷テ、月代見ル禪僧」、⑤「其外待法師、遁世者ナントアマタ」が列席するさまが活写される⁽⁴⁶⁾ (245頁)。京大本の①～⑥と比すると、①と②の老高僧、④と⑤の稚児二人が一致することは明白である。談論の場で役割を果たす3人は、⑤の中の遁世者1名待法師2名が割り当てられると思われる。「遁世者ト覚敷テ、楚忽気ナル声ニテ」(ア)、「青待法師ノ声ニテ」(イ)、「若キ待法師ノ声ニテ」(ウ)とすべて隣室からの聴覚のみにより推察されている(245・246頁)。正解を述べるのは、「彼ノ僧」「此入道ト覚ケテ少シ訛レル老声ニテ」(246頁)から⑤の禪僧と見られ(エ)、京大本と隔絶する⁽⁴⁷⁾。

このように、天理本の配役は京大本のそれとかなり相違する点があり、両書は構想を異にする側面があると思われる。しかしながら、天理本の質問者が15・16歳(「三五、二八」は、 $3 \times 5 = 15$ と $2 \times 8 = 16$ を意味する)の少年であり、さまざまな年齢層の成人が解答し、その場を「鳩杖」の高僧が統御する構図は、京大本と共通し、広義の世代間コミュニケーションや世代間教育の場を顕現していることを証するものでもある。

ただし、これらの情報は京大本と同様に隣の局から垣間見する人物によってもたらされ、この人物が天理本『梅松論』の筆者になるのであるが、その性別・年齢は不明である⁽⁴⁸⁾。この点は京大本と大きく異なる。

京大本と天理本において、枠物語の外枠部分が相当の質量感をもって、作品世界を方向付けるのに対して、流布本系統の『梅松論』は、枠物語式歴史物語中で最も簡略な外枠しかもたず、枠物語の機能がほとんど消失した作品となっている。序文に現れる時間と場所は辛うじて古本系と一致するが、登場人物と談論内容は極端に縮小・変質している。鳩杖の法印をリーダーとする学究的一団も、歴史語りを傍聴して筆録した具体的な筆者も存在しない。「有人」の質問に「なにがしの法印とかや申て、多智多芸の聞えありける老僧」が唐突に現れて、問答のない物語を開始するのである⁽⁴⁹⁾ (36頁)。老僧は「とし老ぬる」事実により過去の出来事を語る資格をもつと言うだけで(36・37頁)、歴史物語の語り手に相応しい超越性は見られない。世代間の問題も認められない。筆者も「或人」としか記されず(141頁)、世代は判断できない。

以上のように、『梅松論』の外枠の大意に注目して、諸本を検討すると、明瞭な世代差に基づいて枠物語の外枠を構築しているところに、京大本と天理本の特色が確認できる。その上、京大本と天理本は、それぞれに独自の外枠構想をもつと思われる。一方、流布本系諸本においては、外枠はほとんど形骸化して、機能していない。また、外枠のさらに外側にいる「筆者」については、京大本で世代が意識されて入念に造型されていると思われるのに対して、天理本では具体性を欠き、流布本では作品

に意味をなしていない。

外枠の部分のみに注目すると、3系統の伝本は、大きく異なり、同一作品と安易に認定はできないほどである。このような差異が生じた因由は、次々節で述べる。

5 『梅松論』の時代区分法

『梅松論』の世代問題を考察するに際して、その前提として外枠部分以外の世代認識にも言及しておく。

『梅松論』の叙述対象は、実質的には鎌倉幕府の成立から室町幕府の成立までと考えられる。源頼朝の征夷大将軍就任から足利尊氏が同じ地位に就くまでと言ってもよい。この時代は「先代」と一括される時代でもある。京大本『梅松論』では、聞き手の「先代ノ謂レ当御代ノ事、今日コソクモリナキ鏡ニ向フ心地シテ候へ」という賛嘆を受けて語り手が「今ハ問答ヲ留ベシ」と言って歴史語りの幕を閉じている(45・46頁)。寛正本も同内容である。全編が先代(鎌倉時代)史とそれに替わる当代(足利新時代)の到来を主題にしていたことの証左でもある。

諸本の異同があり、特定が困難な側面はあるが、「先代」が鎌倉時代全体に該当することはすでに論証した⁽⁵⁰⁾。「先代」の後に「当代」があり、前に「平家ノ代」があるというのが『梅松論』の歴史意識である⁽⁵¹⁾。先代と当代の間の建武政権の時代は、過渡期・分岐点であって、一つの時代を形成しているとは見なされていない。これが、『梅松論』による大きな時代区分になる。

それでは、叙述対象の先代140年間はどのように区分されているのであろうか。作品内には、時政から高時までの北条得宗の継承実績、鎌倉将軍の継承過程、天皇家の系譜が記され、作品世界の支柱となっている。しかし、それは後継者が持続的に確保されていることを確認するもので、世代や時代による歴史的变化が示されることはない。将軍については、はるか太古に溯り、数多くの武将名が紹介される。日本武尊以下、十人以上の将軍が列挙され、異朝中国の武将・軍師も十人が名を連ねる。異なった時代に異質な功績を残した著名人たちであり、この上なく多彩な顔ぶれである。しかし、全員が「朝敵ヲ討武将」(京大本、9頁)と単一の性格しか与えられていない。時代による変遷を無視して、等質の将軍職が持続していることのみを提示するのである。

たしかに『梅松論』には天皇・将軍・執権の系譜が丹念に記されている。この点では、『大鏡』や『今鏡』の列伝部の構想を継承していると言える。しかし、そこには世代による格差は表されていない。『今鏡』では、世代に基づいて時代区分が成されていたことを上に指摘した。『増鏡』では、天皇家の系図・系譜の中に4人または5人の「始祖」を設定することによって、家系による時代区分が行われていると思われる⁽⁵²⁾。『梅松論』でも、皇統譜の分岐点として後嵯峨院が特別に形象されている⁽⁵³⁾。しかし、『梅松論』の後嵯峨院は『増鏡』の場合のように作品世界を統御してはいない。その遺勅が北条政権の是非を判断する指標となるのが最も重要な役割であ

る。一方で、皇統を改廃した後堀河院即位は時代区分を示す好材料であったにもかかわらず、その事実が隠蔽されて、旧皇統が持続しているように仮構されるのである⁽⁵⁴⁾。

このように、『梅松論』は叙述対象の先代を恒久不変の時代と捉える傾向が顕著に認められる。先代の安定性と不朽性が標榜されているとも言える。

以上は、『梅松論』の歴史叙述全体の特質であるが、個別の記事においても同様の傾向が認められる。たとえば、承久の乱勃発に際して、北条義時・泰時父子が対論する場面が描かれる。王土王民思想に基づき降伏を進言する泰時に対して、父義時が天命思想に依って主戦論を開示する場面である⁽⁵⁵⁾。ここには政策上の根本的な対立が典型的に表出されているが、世代間格差とは見なせない。同様の対立を他の箇所に見いだすこともできない。このほかにも公武に親子関係、同族関係は描かれるが、世代による差異を指摘できるものは多くない。

さらに言えば、仮に作品内に個別の世代間格差が見いだされたとしても、それと外枠設定との関連性は認められないであろう。後嵯峨院時代を画期とする主想があったとしても、語り手たちの造型と結びつく要因は見あたらない。これも先行の枠物語式歴史物語と大きく相違する点である。

唯一、例外的に世代と時代の差異が示される場面がある。筑後入道妙恵の自害に関する一連の記事の中に、語り手の法印の有様が描かれるのである。法印は、「涙ヲ流シ声モ不惜」に特に「少人二人」に三浦義明の討ち死の精神と「今時ノ若人」との違いを教える。語り手が介入したときに限って、世代間格差が語られると言えるであろう。「先代」は固定的な内側の世界であって、その中に世代差を表すことはないが、外枠の時代の少年や若人の世代とは格差をもつものかもしれない。

そうであれば、外枠の問答が行われている時点が問題となる。先代や『梅松論』の叙述対象の時代と歴史語りの時代の関係、作品の内側と外枠の時間差はどのようなものであろうか。それを明らかにするための手がかりとして、まず、作品の成立時期を確認する。

『梅松論』の成立時期は、貞和五年(1349)成立説が通説とされる場合が多かったが、正平7年(1352)～嘉慶2年(1388)の間と見るのが趨勢である⁽⁵⁶⁾。すなわち、元弘2年(1332)の後醍醐帝帰還記事に「光陰移り来テ、過ニシ方廿余年ノ夢ナレバ」(京大本、14頁)とあることを主な根拠に、元弘2年の20年後の正平7年(文和元年、1352)以降とされ⁽⁵⁷⁾、『梅松論』を参照している『源威集』の成立が嘉慶年間(1387～1388)であることからそれ以前の成立と見なされているのである⁽⁵⁸⁾。これを大体の目安にして、延文3年(1358)～康安元年(1361)説⁽⁵⁹⁾や観応2年(1351)かその直後とする説⁽⁶⁰⁾が提起されたが、作者説も関連して問題は複雑で、決着はみていない。

この状況を踏まえると、『梅松論』の作品世界で歴史語りが行われた時点(外枠の時代)を仮定することも簡

単ではない。最終記事が建武4年(1337)の金崎落城であることを重視すれば、その年が外枠の時期でも支障なく、成立時期を下限に仮定すると嘉慶2年(1388)頃になり、その間50年間は、世代を検討するにはあまりにも広すぎよう。そこで、「過ニシ方廿余年」という記述を信頼すれば、正平7年(1352)ということになり、最近の所説がこのあたりに集中する傾向があると思われるので、14世紀半ばを外枠の歴史談義が行われた時点と仮定してみる。

すると、先代(鎌倉幕府)滅亡の元弘3年(正慶2年、1333)は15～20年程度の過去の出来事ということになる。外枠の配役では、少年二人が先代を知らない世代になる。80歳前後かと思われる法印は、最も新しい嘉慶年間(1387～1388)が外枠時点としても先代の体験者であることは動かない。『梅松論』の問答は、先代を知る世代と知らない世代との間に成立していると言える。他の配役は双方に属し得るが、問答の主要な当事者ではない。外枠の人々にとって、先代の140年間は等質であるが、先代後の「当代」とは異質なのである。

6 『梅松論』の変容と世代間格差

前節で、外枠の時代は、作品成立の時代に重なるのではないかと想定してみた。その場合、先代を生きた語り手(問答の答え担当)と、当代のみに属する聞き手(問答の問い担当)との間に明確な世代間格差が認められる。先代と当代の相違である。前々節では、外枠部分を諸本間で比較して、世代差が関与する古本系と関与しない流布本系に峻別できることを明らかにした。また、同じ古本系でも京大本と天理本には相違が見られた。

また、中世の歴史物語が教材的機能をもつとすると読者との世代差も軽視できない。作品成立時点から遠ざかり、先代が遠くなるに従って読者の世代も変化するはずである。

これらを踏まえて、以下に、読者の変遷と『梅松論』の外枠部分との関係を世代・時代の観点から検証する。

京大本と天理本の問答の発端は、「先代様」の語義を小児が質問したことにある。流布本の歴史語りも「先代」が減じた経緯の質問が契機になっているので、やや近似する。まず、この問答始発部分の京大本に注目する(以下、引用本文の必要箇所は波線を付す)。

何トナキ物語ノ様々聞ユルニ、暫静テ、小児ノ片口ニテカネ黒ニ打笑テ「面々ニ尋可申事侍」ト云出給フ。何事ニテ候覽ト各申ケレバ、「当世何事モ誠シク穩便ナル事ヲバ、先代様ト申テ貴賤口遊候。何ナル謂ゾヤ。承度候」トノ給心、誰ニモ返事ヲ申人モナシ。暫アテ法印宣給ケルハ、「小児ノ知ヌ事ヲ尋給フ、尤ニテ候。各存知ノ分ヲ可被申」トアリケレバ、(京大本、8頁)

仏事の合間の雑談で、少年の一人が今の時代に「誠シク穩便ナル事」を「先代様」と言うことが多いが、その謂われを説明してほしいと言ったところである。「穩便」

(穏やか、静かななどの意)と「先代+様」との関係が理解できなかったのである。あるいは、後の問答の様子からは「センタイヤウ」と発音でしか理解していなかったのかもしれない。しかし、この言葉自体はしばしば聞いていたようである。この問いに、当初は誰も答えようとしなかった。大人にとっても難問だったとも考えられる。結局、3人の成人が応ずるが、始めの2人は、「千体」「闍提」と誤解して、仏説を引用しつつも正解にはほど遠かった。3人目の「七十斗見ル法師」覚弁がやっと正解するのである。

最初に誤答した遁世者(⑥「ヒタキ付ノ跡ミユル遁世者」)の年齢は不明であるが、2番目の侍法師は②「卅余ナル僧」か③「廿七八斗ナル僧」のどちらかであろうが、いずれにしても30歳前後で、先代の体験者ではない可能性が高い。最後に正解した覚弁は、先に⑤「七十二及老法師一両輩」と紹介された人物で、「七十二及」「七十斗」と2度にわたって70歳前後であることが記されている。「先代様」の知識の有無は世代と関係すると読むこともできる。そうすると最初の遁世者も若年ということになる。この語ができた当初は語源が知られていたが、年の経過とともに語源が忘れられた状態で用いられるようになったのであろう。やや不審なのは、

彼高時以^レ往ノ代ハ当御代ノ先タル間、先代ト云歟。
全高時守邦ノ時ニ称置タル名ニモ非ズ、又当御代ヨリ定置ル、称名ニモ非ズ、自然ト人口ヨリ出タリ。
(12頁)

と、「先代」は当代になって発生した語であることが明記されている点である。当代ができる前に先代と呼ぶ根拠はないのだから当然ではあるが、「先代様」も当代以後に出現したに違いない。そうすると、この語は1333年の幕府滅亡後まもなく生まれて短い期間で使われなくなったと考えるしかない。その場合、京大本の外枠時点は、14世紀中葉よりもかなり遅いのではないか。仮に1352年に30歳前後なら1333年の幕府滅亡後ある程度たってから現れたと思われる「先代様」の語源を知っていると思われるからである。

京大本の外枠においては、「先代様」は頻用されているが、発生時に立ち会った高齢者しか語源を知らない語ということになり、世代間格差を反映している。または、「先代」が「穏便」であったことを体験しているという意味とも考えられる。これらの場合は、世代差に伴って旧世代が新世代に先代の歴史教育ができることとなり、『梅松論』世界の語り手は老人世代の役割となる。

次に天理本を検討する。

折節、參詣ノ者共ノ、無何ト事共云シロフ中ニ、先代様ノ人ナンメリト申ス声シテ過ニケリ。其時少人ト覚ヘテ、只今申ツル先代様トハ何事ニテ侍ルソ。若シ先代ト申所ノ侍テ彼コニ住ム人ノ風情ノ世ニ替テ有ヤラント問給ケレハ、(天理本、245頁)

誰とも分からぬ通行人の会話に「先代様ノ人ナンメリ」という一言を聞いた少年が、「先代様」とは何か、「…の人」とあったので、「先代」という土地があってその住人

の風体が特別なのか、と問うのである。彼にとっては初めて聞く言葉であり、「先代」という漢字は当てられなかったであろう。今度は3人が即答する。◎「其外侍法師、遁世者ナントアマタ」と末席に一括された中から「遁世者ト覚敷テ、楚忽気ナル声」「青侍法師ノ声」「若キ侍法師ノ声」が解答する。先の2人は京大本と同じく「千体」「闍提」と誤り、3人目の若き侍法師がほぼ正解する。いずれも年齢は記されないが、後の2人は明らかに若い。正解者も若い。

天理本では、「先代様」の知識は若くても持ち得るようである。また、15、16歳程度の少年は「先代様」という言葉自体を聞いたことがなく、青年は語源は熟知しないまでも大体は聞き知っているであろう。大人社会でのみ用いられる用語であったとも考えられる。青年と少年の間の世代差を読み取ることも不可能ではない。

また、少年がこの語をまったく知らないので、京大本に比して、天理本の外枠時点はかなり遅い時期が想定できる。これが読者の実態を投影しているとすると、京大本の方が天理本よりも古い時代の本文を伝えると言える。

最後に、流布本(延宝本)の「先代」を取り上げる。
角で暫く念珠の隙有けるに、有人の云、かゝる折節申せば憚あれども御存知ある方もやあるとおもひ侍て、多年心中の不審を申也。知召かたもあらば御物語あれかし、抑、先代を亡して當代御運を開かれて、榮曜代に越たる次第、委く承度候。誰にても御語候へかしと申侍りければ、静返りてありけるに、(延宝本、36頁)

群衆の中で、「有人」が日頃の希望を叶えるために、「先代」滅亡と当代繁栄の経緯を問いかけ、「なにかしの法印とかや申て、多智多芸の聞えありける老僧」が鎌倉時代史を物語る。すでに枠物語の意味が失われ、「先代様」という語彙も消滅していたことが予想される。古本系よりも新しい可能性が高いであろう。読者も新しい時代に属すると思われる。

以上のように、序文を残す主要3系統の『梅松論』を対比すると、時代とともに変容していった痕跡が明らかになる。中世の枠物語式歴史物語の1作品として、外枠部分に世代間格差を内在させ、世代間教育に資する要素を内包し、初学者を主とする読者の平易な歴史教育に適するように設定され、時代の変化に応じて変容していったと考えられる。歴史物語と世代間教育との関係を典型的に具現する作品であると思われる。

結

「先代(様)」に注目すると、『梅松論』には、歴史を実見してきた「先代世代」と書物や教育でしか歴史を知り得ない「当代世代」との対照性が見いだせる。これは前述の『増鏡』と同一の特徴である。『大鏡』の世継翁と若侍との関係も類同する。しかし、『梅松論』は若い世代を少年に設定する点で、初学者向けの性格が鮮明で、

表3 枠物語式歴史物語の語り手と聞き手の年齢差

No.	作品名	語り手	聞き手	年齢差
1	大鏡	大宅世継(190 または 150 歳) 夏山繁樹(180 または 140 歳)	年三十ばかりなる侍めきたる者。(聴衆多数)	約 120 ~ 160 歳 約 110 ~ 150 歳
2	今鏡	大宅世継の孫女(150 歳以上)	女性(・友人多数)	100 歳以上か
3	水鏡	修行者(34、5 歳) *葛城山の仙人の話を伝える	老尼(73 歳)	約 - 40 歳 *算出不能
4	秋津島物語	塩土の翁	老人	算出不能
5	増鏡	老尼(100 歳をはるかに超える)	不明(女性)	100 歳程度か
6	梅松論	京大本 仁和寺の法印 天理本 入道 流布本 なにがしの法印	児二人(20 歳程度・15,6) 児二人(15・16 歳) 参詣者複数	約 50 歳か 1 ~ 2 世代程度か 1 ~ 2 世代程度か

両鏡物作品よりもさらに教育的、世代間教育的であると思われる。また、枠物語系統の歴史物語中で、最も語り手と聞き手の年齢が接近し、非現実的な超長寿者を設定しないのも『梅松論』の特色になる(表3参照)。そこには旧世代が新世代に知識と経験を問答によって授受する関係、典型的な世代間コミュニケーションが成立しているとも言えるであろう。さらに言えば、『梅松論』が聞き手と筆者が別人であり、『大鏡』と並ぶ三重構造の枠物語を形成している点も無視できない。「(作者一)筆者一語り手一歴史世界」の多層性が成り立つ。しかも、語り手が聞き手である少年に歴史を教示するのと同様に、筆者も子孫に歴史を伝授するために本書を著述したのである。おそらく、読者も同様に享受したであろう。『梅松論』の生成・継承・変容の過程は、多重的な世代間歴史教育の連鎖の過程でもあったと思われる。

注

- (1) 福田景道「歴史物語の範囲と系列」(『島根大学教育学部紀要』第27巻第1・2号、平成5年12月・平成6年3月)参照。
- (2) 福田景道「中世における歴史叙述と通史教育」(『日本文学』第46巻第7号、平成9年7月)参照。
- (3) 弓削繁校注「六代勝事記」(『六代勝事記・五代帝王物語』中世の文学第1期26、平成12年、三弥井書店刊)63頁。この前には「いさゝか先生の徳失をのこし」とあり、この直後には「身のためにしてこれをするさず、世のため民のためにして是を記せり」と続く。過去の治政の知識を今後の為政に活かすことを執筆目的とすることが明言されているが、その読者の中には、これから官途に就こうとする新進の学徒が明確に含まれている。
- (4) 弓削繁校注「五代帝王物語」(前掲書<3>)156頁。
- (5) 『秋津島物語』の引用は、沼沢龍雄校訂「秋津島物語」(『松井博士古稀記念論文集』昭和7年、日黒書店刊。『歴史物語Ⅱ』<日本文学研究資料叢書、昭和48年、有精堂刊>再録)による。以下同じ。
- (6) 増淵勝一「歴史物語と史伝」(『時代別日本文学史事典中世篇』有精堂、平成元年刊)参照。
- (7) 京大本『梅松論』。同本の引用は、高橋貞一「翻刻・京大本梅松論」(『国語国文』第33巻第8・9号、昭和39年8・9月。京都大学文学部国語学国文学研究室編『京大本梅松論』<昭和39年、京都大学国文学会刊>も同文)によった(以下同じ)。なお、京大本以外の『梅松論』にはこのような記述はない。
- (8) 小児の質問の言葉の中にも、「タレモ知事ハ勿論ナレドモ、我ハ更ニ不知也。タゞ語給へ」(22頁)とあり、聞き手にも歴史を学習しようという意識が認められる。
- (9) 岡見正雄・赤松俊秀校注『愚管抄』(日本古典文学大系86、岩波書店、昭和42年刊)129頁。
- (10) 前掲書(3)101頁。
- (11) (1)に同じ。
- (12) 五十嵐力「大鏡研究」(『日本文学講座』第15・16巻、昭和3年、新潮社刊、同著『大日本古典の偉容』<昭和17年、道統社刊>などに再録)。
- (13) 市古貞次「御伽の文学」(西尾実先生古稀記念論文集『中世文学の世界』昭和35年、岩波書店刊、市古貞次著『中世小説とその周辺』<昭和56年、東京大学出版会刊>再録)。
- (14) 加美宏「梅松論解説」(同他校注『梅松論・源成集』新撰日本古典文庫3、昭和50年、現代思潮社刊)。
- (15) 森正人「<物語の場>と<場の物語>・序説」(説話と説話文学の会編『説話論集 第一集 説話文学の方法』平成3年、清文堂出版刊)、同「巡の物語の場と物語本文」<『日本文学』第41巻第6号、平成4年6月>など。
- (16) 阿部泰郎「対話様式作品論序説—『聞持記』をめぐるて—」(『日本文学』第37巻6第号、昭和63年6月)など。
- (17) (1)に同じ。
- (18) (2)に同じ。
- (19) 前掲書(3)62頁。

- (20) 弓削繁「解説」(前掲書〈3〉) 8頁など参照。
- (21) 最も若く、1163年生まれの人物が1223年に記していると見れば、数え年61歳になる。1161年生まれで1224年執筆の場合、最も高齢の64歳になる。
- (22) 武久堅「五代帝王物語」(『日本古典文学大辞典』第2巻、昭和59年、岩波書店刊) 参照。
- (23) たとえば、弓削繁「六代勝事記の成立」(『山口大学教養部紀要』第16巻、昭和57年1月。同著『六代勝事記の成立と展開』〈平成15年、風間書房刊〉に再録) には、ここに示される経歴が真実を語るものであることが説かれている。そこで紹介される加地宏江「源威集の作者について」(『高野山大学論叢』第12巻、昭和52年2月。同著『中世歴史叙述の展開—『職原鈔』と後期軍記—』〈平成11年、吉川弘文館刊〉に再録) にも叙述内容と作者像の一致が例証されている。たしかに実際の作者と作品に記される履歴が一致する可能性は認められ、両論の姿勢は否定しない。しかし、その場合は、「作者」が「筆者」のモデルになっている例と見なすべきであろう。弓削・加地両氏の考察を否定するのではなく、作品論の立場から「筆者」の役割に注目する意味を明らかにしたものである。特集号の性格に基づき、本稿が国文学や歴史文学・歴史叙述の分野のみに属さないが故の贅言でもある。
- (24) 『大鏡』の引用は、加藤静子他校注・訳『大鏡』(新編日本古典文学全集34、平成8年、小学館刊) により、() 内に適宜語句を補う。以下同じ。
- (25) この二人の老人の年齢については、本文に世継「一百九十歳」、繁樹「百八十」歳と明記される(16頁)。しかし、同じ箇所、世継の出生年を清和天皇譲位の年、貞観18年(876)と確言しており、これに従えば、昔語りが行われている万寿2年(1025)の時点には150歳であったと計算できる。ここに40年の矛盾が生じるのであるが、これを解決する方途は見つかっていない。松村博司校注『大鏡』(日本古典文学大系21、昭和35年、岩波書店刊) 438・439頁、同『『大鏡』の成立』(同著『栄花物語の研究 補説篇』平成元年、風間書房刊) など参照。
- (26) 福田景道「不老長寿の意義と物語の世界—竹取の翁と夏山繁樹—」(『福祉文化』創刊号、平成13年3月) 参照。
- (27) この若侍は、『大鏡』の末尾に後に付加された「後日物語」においては、老法師として登場し、世継翁の語り続く時代の語り手となって、さらに新しい世に歴史を教授する役割を果たす。
- (28) 『増鏡』本文の引用は、時枝誠記・木藤才蔵校注「増鏡」(『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系87、昭和40年、岩波書店刊) による。以下同じ。
- (29) 『増鏡』に跋文がないのを、元来存在したものが欠落したものと見なす論考がある。それを認めると、跋文に聞き手の正体が記されていた可能性が高いが、現状では素姓不明と見るほかはない。
- (30) 福田景道「歴史物語の系譜と『増鏡』—継承性と自律性の観点から—」(『島大國文』第20号、平成3年12月) 参照。
- (31) 『大鏡』に「翁らが説くことをば、日本紀聞くと思すばかりぞかし」(58頁) という一節があり、『今鏡』序文には「つくも髪」という語が用いられている。
- (32) 『今鏡』には143年と記されるが、万寿2年から嘉応2年までは足掛け146年になる。
- (33) 『今鏡』本文の引用は、竹鼻績訳注『今鏡(上)』(講談社学術文庫、昭和59年、講談社刊) による。以下同じ。
- (34) 福田景道『『今鏡』に描かれる藤原道長の栄華—残映としての『大鏡』—』(『島大國文』第18号、平成元年11月)。
- (35) 福田景道前掲論文(34) 参照。
- (36) 女性版『大鏡』と言われる、物語評論『無名草子』も代表的な枠物語であり、そこにも、平安時代の時代区分と世代間格差との関係が見いだせるが、通史的歴史物語の範疇には入らないので、本稿では触れない。
- (37) 古本系には、他に彰考館蔵寛正七年奥書本(寛正本)があるが、下巻のみの残存であるので序文を欠き、本稿の比較対象とはならない。
- (38) 『梅松論』の諸本研究は、五十嵐梅三郎「梅松論の基礎的研究(一)」(『立正史学』第10号、昭和13年3月)、同「梅松論の基礎的研究(三・完)」(『立正史学』第13号、昭和16年3月)、井上良信「太平記と梅松論」(『史学研究』第10集〈第48号〉、昭和27年6月)などに始発するが、主要古写本すべてを対比するのは、高橋貞一「京大本梅松論解説」(『国語国文』第33巻第8号、昭和39年8月。京都大学文学部国語学国文学研究室編『京大本梅松論』〈昭和39年、京都大学国文学会刊〉にも収録)、釜田喜三郎「梅松論と太平記との関係」(『心の花』第800号、昭和40年6月)・「寛正本梅松論発掘の跡—小川信氏の『梅松論諸本の研究』を読む—」(『神戸商船大学紀要(第一類・文科論集)』第19号、昭和46年3月)・「寛正本梅松論発掘の跡(続)」(『神戸商船大学紀要(第一類・文科論集)』第20号、昭和47年3月。以上の釜田3論文は他の関係論文とともに同著『太平記研究—民族文芸の論—』〈平成4年、新典社刊〉に再録)、小川信『『梅松論』諸本の研究』(岩橋小彌太博士頌寿記念会編『日本史籍論集 下巻』昭和44年、吉川弘文館刊)・『『梅松論』諸本の研究・補説』(『国学院雑誌』第80巻第11号)、加美宏前掲解説(14)、小助川元太「天理図書館本『梅松論』考」(『唱導文学研究』第3集、平成13年2月。同著『行誉編「熾囊鈔」の研究』〈平成18年、三弥井書店刊〉に再録)、福田景道「天理本『梅松論』の歴史構想—正確性と精密性の追求—」(『島大國文』第32号、平成20年3月)などである。
- (39) 京大本の設定については、武田昌憲「京大本『梅松

- 論』の問答部分について—「梅松論」小考(3)—」(『古典遺産』第34号、昭和58年9月)に詳論されている。
- (40) 引用本文には、「侍法印」とあるが、京大本の複写により「侍法師」に改めた。
- (41) 「鳩杖」は70歳を表すとも言われるが、ここでは概数として「80歳程度か」とした。加地宏江前掲論文(23)、同「源威集作者再論」(同著『中世歴史叙述の展開』〈前掲(23)〉)参照。
- (42) 法印の年齢は、筆者の目に「鳩杖ニ及ル」と映ったのであって、実際にはそれよりはるかに高齢であったと考えてもよい。
- (43) 寛正本の末尾近くに「清書シテ八十ノナクサミトモナシ、又尼ハ孫彦数ヲ覚ヘス」(313頁)とあり、京大本にはほぼ一致する(寛正本の本文は、矢代和夫翻刻の「梅松論 下(寛正七年書写本)—水府明德会彰考館文庫蔵」〈同他校注『梅松論・源威集』(前掲〈14〉)〉による)。なお、小川信は寛正本と京大本とに親近関係を認める(前掲2論文〈38〉)。
- (44) 福田景道「歴史物語としての『梅松論』」(『島根大学教育学部紀要』第28巻、平成6年12月)参照。なお、京大本のみに『大鏡』を継承する姿勢が見えることから、京大本の形が原本に最も近く、天理本では、『大鏡』からの継承性が軽視されたために改修の際に不用意に削除された可能性が高いと思われる。しかし、京大本で特に先行歴史物語作品との関係を際立たせるために、『大鏡』との類似表現が加筆されたとも考えられるので、この徴証による京大本と天理本の先後関係の判断は行わない。
- (45) 寛正本には、「クモリナキ鏡ニ向フ心地」はある(312頁)。
- (46) 天理本『梅松論』の本文は、小助川元太「翻刻 天理大学附属天理図書館蔵『梅松論』上下」(同著前掲書〈38〉)より引用する。以下同じ。
- (47) 小助川元太前掲論文(38)参照。
- (48) 跋文で「予」と自称することから男性であろうと推定されている。『史書あるいは合戦記としての梅松論をめぐって』(新撰日本古典文庫3 梅松論・源威集別冊、昭和50年、現代思潮社刊)の対談における加美宏の発言(5頁)参照。
- (49) 流布本系『梅松論』は、矢代和夫・加美宏翻刻・校注の「梅松論(延宝六年書写本)—水府明德会彰考館文庫蔵」(『梅松論・源威集』前掲〈14〉)から引用し、延宝本で代表させた。
- (50) 福田景道「『梅松論』の基幹構想—「將軍」と「正統」—」(『島大國文』第23号、平成7年2月)。
- (51) 「去保元平治ノ比、清盛禪門ノ威勢ヲモツテ政務ヲ自専ノ間、時ノ人号之平家ノ代ト云歟。(中略)彼高時以往ノ代ハ当御代ノ先タル間、先代ト云歟。」(京大本。11・12頁)
- (52) 福田景道「『増鏡』の予言記事をめぐって」(『島根大学教育学部紀要』第26巻、平成4年12月)参照。
- (53) 福田景道「『梅松論』の皇位継承史構想—後堀河院・後嵯峨院・光厳院の正統性—」(『国語教育論叢』第14号、平成17年3月)参照。
- (54) (53)と同じ。
- (55) 石毛忠「南北朝時代における天の思想—『梅松論』をめぐって—」(『日本思想史研究』創刊号、昭和42年3月)、玉懸博之「『梅松論』の歴史観」(『文芸研究』第68集、昭和46年10月。同著『日本中世思想史研究』〈平成10年、ペリカン社刊〉に再録)、小秋元段「『梅松論』の論理と構成」(『駒木原国文』第8号、平成9年3月。同著『太平記・梅松論の研究』〈平成17年、汲古書院刊〉に再録)など参照。
- (56) 長谷川端「梅松論」(『日本古典文学大辞典』第5巻、昭和59年、岩波書店刊)、益田宗「梅松論」(『国史大辞典』第11巻、平成2年、吉川弘文館刊)、加美宏前掲解説(14)など参照。
- (57) 五十嵐梅三郎「梅松論の基礎的研究(三・完)」(前掲〈38〉)。
- (58) 加美宏前掲解説(14)。
- (59) 武田昌憲「『梅松論』の成立に関する一考察」(『中世文学』第32号、昭和62年5月)。
- (60) 小秋元段「『梅松論』の成立—成立時期、および作者圏の再検討—」(『太平記の成立』軍記文学研究叢書8、平成10年、汲古書院刊。同著前掲書〈55〉再録)。